

# 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面

松下 姫歌・吉田美悠紀<sup>1</sup>

(2007年10月4日受理)

A Qualitative Study on “Weak” Friendships among Contemporary Adolescents

Himeka Matsushita and Fuyuki Yoshida

**Abstract.** It is generally admitted that the adolescents build deeper friendships as they grow older, and they make deeper relationships with their own selves. But since 1980s, it has begun to be noticed that modern Japanese adolescents tend to have weaker forms of friendships. The previous researches have clarified some forms of their weak friendships. Okada found three forms of weak friendships of adolescents; 1) Crowd - they prefer to gather in crowds; 2) Careful - they take care not to hurt each other; 3) Avoiding - they avoid deep relationships with others. But their qualitative differences still remain unexplored. The purpose of this paper is to re-examine what each of these three forms of relationships means psychologically in terms of the adolescents' quest for their selves.

Key words: contemporary adolescents, weakness of friendships

キーワード：現代青年、友人関係における希薄さ

## 1. はじめに

青年期の友人関係は、年齢とともに、深く親密な関係に発展していくとされている。しかし、近年、特に1980年代頃から、わが国では、青年期の友人関係における“希薄さ”が指摘されている。さらに、実証的研究から、友人関係の“希薄さ”に質的に異なるタイプがあることが見出されている。

本研究では、青年期の友人関係に関する従来の知見を踏まえた上で、近年指摘される友人関係の“希薄さ”に関する研究史を俯瞰し、“希薄さ”の質的側面について検討すること、および、従来の知見との比較検討をおこなうことを目的とする。

## 2. 青年期の友人関係に関する従来の知見

### 2.1. 青年期の友人関係と自己の発達

#### (1) 第二の個体化

青年期は、乳幼児期の分離-個体化 (Mahler, 1975)

になぞらえて「第二の個体化」(Blos, 1967)と呼ばれ、親から心理的に離れ、自立し、個を確立し、内在化された幼児対象からの独立を目指す時期である (Blos, 1967, 1985) とされている。青年期の対人関係の中心は、児童期までの親子関係から、友人関係へと移行していき (長沼・落合, 1998)、青年は友人関係を築く中で自己と言えるものを見いだしていく。

#### (2) 友人関係と親密性

Damon (1983) は、青年期の友人関係は、活動や物の共有を中心とした関わりをする児童期とは異なり、内的体験の共有や友人に対する忠誠や親密性を中心とした関係に変化すると述べている。

この点について、Sullivan (1953) は、児童期やそれまでには見られず、前青年期のはじめに認められるめざましい標識として、親友 (chum) と呼びうる「同性の特定の人一人に対して」の「対人的親密欲求 (the need for interpersonal intimacy)」を挙げている。

親密性 (intimacy) とは「2人の、個人の価値を構成しているもの全てについて確かめることが許される対人状況」であり、「個人的価値を確かめていく作業には、私が協働作業 collaboration と呼ぶ関係の型が

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

必要である。しかも、その協働作業は、相手の要求に対しなるべくびったり満足のいくものとなるよう沿おうと調整されることで、ますます相互の満足といえるようなものに近づいていき、しかも、安全保障機構もますます似たものとして維持されていく (Sullivan, 1953) [訳：筆者]。つまり、親友関係の親密性の中で、相手を通して相互に自分を確認し、相手を自分と同等のものとして見て、要求をどこまでも追求し、必要な支えを探るといふ作業がいとなまれていると言える。

Damon (1983) は、こうした親密性や忠誠心は、自分の友人を、自分と同じような能力や興味や内的経験を持ちながらも、自分とは違った人格をもつ人間として認めることで芽生える、友人を一個の個人として理解しようとする欲求と、相手からも同様に理解されたいという欲求が前提となっている。

### (3) 友人関係における同質性と異質性

Sullivan (1953) はこのプロセスを大きく二段階に分けており、前青年期の「同類愛的選好 isophilic choice」から青年期の「異類愛的選好 heterophilic choice」への変化、すなわち「自分と非常に類似している者を求めることから大きな意味で自分と非常に異なっている者を求めることへの変化」が生じるとしている。こうして、青年期には、自己と友人との類似性・同質性だけでなく異質性をも視野に入れ、自分と友人とがそれぞれ一個の個人であることを認め合うようになる (Damon, 1983)。それは同時に、自分の中に見いだしにくい異質なものを、second selfである親友の中に見いだしていくことで、異質なものと関わっていくチャンネルを自らに発掘し、自己理解の枠組みの可能性を広げていくことにもつながると考えられる。

松井 (1990) は親密な友人関係の意義として、①安定化の機能：不安への対処と自我を支える機能、②社会的スキルの学習機能、③モデル機能の3点を挙げている。

児童期までは重要な大人が担ってきたこれらの心理的機能を、青年期には親密な友人が担うことが重要 (宮下, 1995; 落合・佐藤, 1996) である。つまり、同質性が高く、対等かつ親密な相手だからこそ、①安定化機能が自己の安定化機能を育むことにつながり、②対等他者との間における適切な社会的行動を学ぶ (松井, 1990; 宮下, 1995) ことが可能となる。③についても、同質性が高く親密性の高い対等な関係が拠り所でありつつも異質性を有するため、松井 (1990) は、新しい世界を示す手本になると指摘し、岡田 (1987) の実証的研究でも、中学生から高校生にかけての同性の親友像は青年の自己像のモデルとなることが示されている。すなわち、友人は自己を映し出してくれる鏡

のような存在となり (柴橋, 2004)、自己を相対化し内省する機会が得られる (宮下, 1995)。このように、友人関係の深まりと自己をつかみとる作業とは切り離すことの出来ない、相互に影響しあいながら進んでいく過程と考えられる。

### (4) 仲間関係における同質性と異質性

このように、一対一の親友関係は、自己を見いだすいとなみにつながると言えるが、Sullivan (1953) は、このいとなみをより大きな枠組で支えたり補償する仲間関係が生じることについて述べている。保坂・岡村 (1986) は、児童期から思春期にかけての仲間関係の発達段階について、前青年期にあたる小学校高学年頃に、青年期の発達課題である分離-個体化のために、仲間集団を必要とし始め、同一行動による一体感を重んじる gang-group が現れる。この時期には家族の承認よりも仲間の承認が重要になる。青年期に入り、中学生頃には、興味・趣味やクラブ活動などで結ばれ、互いの共通点・類似性を言葉で確かめあう仲良しグループ、chum-group が現れるとしている。さらに高校生以上になると、chum-group としての関係に加え、互いの価値観や理想・将来の生き方等を語り合う関係、peer-group が生じてくる。peer-group の特徴は、仲間との共通点・類似性だけでなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって他との違いを明らかにしつつ、自分の中のものを築き上げていくことである。異質性を認め合い、違いを乗り越えたところで、自立した個人として共にいることが出来る状態が生まれてくると考えられる。

### (5) 友人関係の性質

友人関係の質的側面における発達の变化に関し、中学生より高校生・大学生の方が友人関係により内面的なものを期待 (和田, 1996) し、年齢とともに表面的な楽しさ中心の関係から内面の共有重視の関係へと変化すること (榎本, 2003)、中学生では友人関係は一緒にいる仲間として機能しているが、大学生では、単なる行動を共にする仲間ではなく心理的な支えとなっていること (落合・佐藤, 1996)、中学生頃には自己防衛的で同調的な関わりが優勢であるが、大学生頃には特定の相手と心を打ち明けあい、積極的に相互理解する関わりが優勢になることなどが実証的に明らかにされている。

こうした変化のプロセスに関し、落合・佐藤 (1996) は、同性の友人とのつきあい方を、「深い-浅い」、「広い-狭い」の二軸の組み合わせから捉える質問紙によって調査した結果、①「浅く広い」、②「浅く狭い」、③「深く広い」、④「深く狭い」つきあい方の4種類のうち、①「浅く広く関わるつきあい方」は、青年期

の初めに多く見られた後は減少すること、逆に、④「深く狭く関わろうとするつきあい方」は年齢を増すにつれて増加していくこと、①から④への転換途中に③「深く広く関わるつきあい方」が多くなるとしている。

## 2.2. 自己を捉える様相と友人関係

上に見てきたように、青年期の友人関係は物理的・精神的なソーシャルサポート源の意味合いのみならず、関係を紡ぐ作業を通して、青年各々が自己をつかむ作業にとりくんでいくという重要な意味合いがあると推察される。したがって、友人関係の発達過程において、自己を捉える枠組みや様相も変化すると想定される。

この点に関し、Gilligan (1977, 1982) は、愛着を基盤とし、自己を人間関係の中で捉える Connected-Self と、分離を基盤とし、自己を他者と区別された個別のものとして捉える Separated-Self という、自己の二側面についての概念を提唱している。

両者は統合されうるものであるが、Connected-Self に比重が置かれると、自己は人間関係の中で評価され、Separated-Self に比重が置かれると、個人の力、業績の中で自己が評価される (Gilligan, 1977, 1982)。

先に前青年期から青年期にかけて、友人関係が同質性から異質性へと移行することについて見てきた。これに関し、まずは同質性による自己と他者とのつながりを見いだすことは、相手の中に自分と相似のものを見いだすことで自分をつかんでいくという、Connected な側面での自己を捉えることと言える。このプロセスを踏まえて、友人関係における異質性への視野の開けが生じるが、自分とは異なるものを相手に見いだすという視点が生まれることは、すなわち、心的な次元における自性と他性を区別する Separated な視点が獲得されつつあることを意味する。それによって、自他の各々の個別性が見いだされてくると考えられる。

このように、友人関係を築く中で、自己と他者とを、延長線上に感じたり区別したりして、Connected な側面と Separated な側面とで葛藤を経験しながら、それぞれが自己をつかみとっていきと考えられる。

## 2.3. 親密な友人関係を築くことの意味と困難

Erikson (1968) は、真の親密性は、青年期のアイデンティティ形成に付随し、しかも融合するものであるとし、自分のアイデンティティに確信をもてない場合、すなわち「他人との一また自己の内的な資質との一親密な関係を樹立しない場合」には、①青年は親密な対人関係からしりごみをする、②真の融合や真の自己放棄を伴わない親密行為に身をまかせてしまう、

または、③きわめてステレオタイプ化した対人関係で満足してしまい、深い孤立感を味わうようになるかもしれないと述べている。さらに、「親密性と対をなすもの」として「疎遠性」すなわち、「自己の本質にとって危険な存在と思われる勢力や人々を、否認し、孤立させ、必要ならば破壊してしまおうという用意」を指摘している。

成人期を迎え、実際に自立して生きていくには、さまざまに自分が心的に揺るがされる場面が生じる。それに先立ち、青年期に自己と他者に対する親密な関わりをもつ作業にとりくむわけであるが、そこで、他者との関わりに困難があるということは、それを通じての自己との関わりに困難が生じることでもある。

ここまで、自己の確立と他者との親密性の獲得はひとつながりの作業として理解してきた。しかし、自己をつかむ作業の一方で、他者と親密な関係をつくる作業は、相手の中に自分を融合させ、相手を自分と等価なものとして見ていく、いわば自分を投げたり手放したりする側面を含むという点で、相反する作業としての側面もあるわけである。だからこそ、自分を心的に開くことで何が見えてくるかわからない、自己の変化を伴うような作業に身を投じることは恐怖であり、しかも相手との関係の中に身を投げつつ自分をつかんでいくという作業は、心的次元で自分が相手の中に取り込まれたり、自分を見失ったりする危険を孕むという意味で、さらなる恐怖でありうる。

Erikson の述べた、「疎遠性」を究極とする、①回避的かわり、②表面的な融合、③紋切り型の触れ合わない関わりは、関係における自己拡散や自己喪失の危機に対し、今の自己にしがみつく形での自己防衛のあり方として理解できる。

## 3. 現代青年の友人関係における“希薄さ”

### 3.1. 現代青年の友人関係の特徴

上述のように、従来、青年期は、発達の見て、それまでとは異なる親密で内面的な友人関係を築く時期であるとされており、現在もなお、そのことを支持する研究も多い。その一方で、近年、特に1980年頃から、青年期の友人関係について、表面的な関係にとどまる傾向を指摘する知見や研究も増えている。

#### (1) ふれあい恐怖

臨床上の知見では、現代青年に特徴的な症候群として「ふれあい恐怖」(山田・安東・宮川・奥田, 1987; 山田, 1989, 2002) が指摘されている。「ふれあい恐怖」は、顔見知りからより親密な関係に発展させることに

困難を感じるものであり、浅い人間関係には困らないのに、情的には深められないため、友人との会食や雑談場面での困難が中核的な症状とされる。山田(1989, 2002)は、「ふれあい恐怖」は浅い付き合いは上手にこなすが深い付き合いが出来ないという今日の青年像や、現代の「やさしさ志向」を反映すると述べている。

## (2) 表面的な関係と自己愛

また、非臨床群を対象とした実証的研究において、上野・上瀬・福富・松井(1994)は、高校生の友人関係について、心理的距離が大きい一方で友人への同調性が強い「表面群」の存在を実証的に明らかにしている。「表面群」は、社会と距離をおいて接することを望む傾向が高いが、他者の目を気にする傾向もあることから、同調行動をとってはいるが、集団中心の生き方を望んでいるのでも、協同的であるのでもなく、ただ集団から外れまいと群れ集まっていると推察されている。

岡田(1988)は、自身の学生相談の経験から、表面的かつ軽躁的な対人関係に強迫的に固執する学生が増えていると指摘している。町沢(1992)は、現代青年が強迫的に表面的な見映えに強くこだわることを指摘し、深い付き合いはよい面のみならず欠点やどろどろした側面を見ざるを得ないため、浅い接触しか出来なくなっていると述べている。岡田(1998)は、自己防衛的な友人関係は、自分自身の自己愛が他者の評価に規定されやすく、他者からの注目や賞賛を常に得ていないと自己愛を維持できないために、傷つけられることを警戒する青年の特徴の現れであることを示唆している。

この点に関する実証的研究として、小塩(1998)は、「広い友人関係」では自己愛傾向が高く、「狭い友人関係」では自己愛傾向が低いことを示し、自己愛の高い青年は、特定の相手と接するよりも多くの友人と接しているほうが比較の対象となる友人が多いため、肯定的感覚を維持しやすく、友人と広い友人関係を好むと指摘している。また、「広く浅いつきあい方」は自己愛傾向のうち特に受動的かつ願望的な意味合いの強い「注目・賞賛欲求」が強いことが示され、自分自身に対する肯定的評価が崩れてしまう可能性が高くなるような深い対人関係を回避して広く表面的に付き合うと考察されている。

## (3) 閉鎖性と自己受容・他者受容の低さ

他者を受け容れる態度と自己を受け容れる態度が密接に関連している(川岸, 1972; 板津, 1994)ことは従来から指摘され、人間関係における閉鎖性・防衛性の強さと自己受容の低さの関連(高井, 1999)が指摘されているが、自己受容的でない人は他者に閉鎖性・

防衛性を強める点が、現代の“希薄な”友人関係の特徴と合致する側面(廣實, 2002)として指摘されている。

## (4) 自己と関係の保持と希求の葛藤

このように、表面的で閉鎖的・防衛的な友人関係は、自己受容の低さや自己愛の傷つきを避ける傾向と結びついていると理解しうが、そのような関係の持ち方は、単に自己を守るためという側面だけではないことも指摘されている。

千石(1988)は、「相手の考えていることに気を遣う」と言いながら「心を打ち明けない」というタイプの人間関係を指摘し、心はやさしいが互いに傷つくことを恐れていると指摘している。この点に関して、大平(1995)は、距離を置いて傷つけあわないこと、相手の気持ちを詮索せず踏み込まない暖かい関係を保つことが、現代の青年の対人関係における必要な「やさしさ」となっていると述べている。

藤井(2001)は、現代青年は、相手と親密な関係を持ちたいと願う一方で傷つけあうことを恐れるという葛藤、すなわち「近づきたいが近づきすぎたくない」、「離れたいが離れすぎたくない」山アラシ・ジレンマから逃れるため、「適度な」心理的距離を模索して揺れ動いているとし、実証的に検討している。その結果、山アラシ・ジレンマから逃れるため、相手にしがみつき執着する、相手の動きをうかがう、関わりそのものを避けて相手と隔たりを置く、といった対処がなされるとし、友人関係の“希薄さ”の背後にある、親密性を希求しながらも、自己や関係の揺らぎを避けるためにバランスをとろうとする心的な動きを明らかにしている。

## (5) 現代青年の自己と友人への関わりの特徴

このように、現代青年の友人関係の特徴は、自己や友人への関わりの特徴として見るができる。

自己や友人への関わりにおいて、①表面が整ってポジティブなものに見えるという「見映え」が重視される傾向があり、②その背後に、「深く関わる」ことでネガティブ(に見えるよう)な面に向き合ったり、傷ついたりすることを恐れる傾向(自己受容の低さと自己愛傾向)があり、③そのために、ネガティブな体験や傷つきをお互いにしないように「気遣い」、距離を置いて表面上の暖かさを保とうとする「やさしさ」志向が生じる。自己や友人に対する関わりの希薄さの背後に、自己や関係の保全のための切実な努力ともいえるべき心的な働きが生じていると言える。

## 4. 友人関係における“希薄さ”の質的側面

### 4.1. 友人関係の“希薄さ”の質に注目する意義

このように、現代青年の友人関係における独得の“希薄さ”は、自己や関係に深く関わることで新たな面が見えてくる不安に対する防衛と適応としての機制があることが見えてきた。しかし、現代青年の特徴として、相手と深い接触が出来ない一方で孤独感を訴えたり、人との関わりを避けてはいるが内心は親密な関わりを望んだりしていることが指摘されている（小此木, 1980; 町沢, 1992; 岡田, 1999）。つまり、“希薄”な関係を築くことで相手との衝突を避けて単純に楽になっているのではなく、やはり、そこには自己や友人関係に対する何らかの希求がある。

むしろ、“希薄”に見える関係は、彼らにとって、一筋縄ではいかない探求のプロセスにおける必然をもっていると見るべきであろう。つまり、“希薄さ”は、今の時点での自己や友人関係を保つこととさらなる探求との間の葛藤のあり方でもありうるわけである。希薄に見える関係の中で、自己をつかむプロセスはどのように進み、どのようにつまづき、そこにどんな契機が必要となっているのだろうか。それを見いだしていくことが、本来、希求されている道を見いだしていくことにつながるであろうと考えられる。

この点について考える際、“希薄さ”を「単に深く関われない」という側面で見のではなく、いわば“希薄さ”の中身や性質を問うていくことが必要となる。

### 4.2. “希薄な”友人関係の3つのタイプ

友人関係の“希薄さ”の質的側面について、岡田(1995)は、大学生の友人関係には、①集団で表面的な面白さを志向する「群れ関係群」、②友人に気を遣いながら関わる「気遣い関係群」、③深い関わりを避ける「関係回避群」の3つのタイプがあることを示している。

岡田は現代青年の友人関係に関し、学生相談の臨床的知見を端緒に(1988)、一連の研究をおこなっている(岡田, 1991, 1993a, 1993b, 1995, 1998, 1999)。これまで主に3つの“希薄な”友人関係のタイプの性質に関する研究がなされているが、各研究で得られた知見をつき合わせての、特にこれら3タイプの友人関係における、自己と関係の探求プロセスの質的側面については未だ検討されていない。

友人関係の“希薄さ”の質が異なるということは、そこで感じられている自己や友人の像が異なること、それゆえ、自己や友人への関わりの保持と探求のあり

方やつまづき方も異なってくることが推察される。

ここからは、岡田の一連の研究において見出された知見を整理することで、“希薄な”友人関係の3つのタイプ、すなわち、「群れ関係」「気遣い関係」「関係回避」の特徴を明らかにし、各タイプにおける、自己・友人への関与のあり方、自己と友人関係をつかむプロセスとつまづきのあり方について検討していく。

#### (1) 群れ関係の特徴

「群れ関係」における自己像については、①私的自己意識が低く、②現実自己像を肯定・否定両面において、静的なものでなく動的なものとして捉えている(岡田, 1995)。③自己評価は比較的高いが(岡田, 1993a)、④特に、現実自己の像と親友像が近いほど自己評価が高くなる(岡田, 1995)こと、親友像については、⑤現実自己像と友人像が、肯定動的・否定静的において相関が高く、⑥親友像の方が現実自己像よりも肯定感が高い(岡田, 1995)。関係のあり方については、⑦他者からの視線や評価に敏感であり、深い関わりを拒否するなど、防衛的な関係に見える(岡田, 1993a)。

これらの知見から、今の自分について、自分を動かす力に自己感を感じている一方、まとまった輪郭のある自己像が結べておらず(②)、自分を形あるものとして表現することが難しいことが推察される。そのことが私的自己意識の低さ(①)や評価を気にする傾向や深い関わりを避ける傾向(⑦)に現れていると考えられる。

このことについて、岡田(1995)は、「自分自身の内面に対する関心の低さ」と結びつけているが、それだけでは、群れ関係独得の内面化の難しさを説明できないであろう。この群の内面への関わりの困難さは、自分を静的な像として対象化してつかむことの難しさにあり、それは相当の自我の強さを要する営みである。しかし、自分が全く感じられないわけではなく、動かす力との同一化を通して自分を“感じる”ことができる。そのことが自己評価が必ずしも低くない(③)ことにつながっているのではないかと推察される。

友人として求められるのは「自分を動かす力に自分を感じる」似たタイプである(⑤)。ノリ的な生体リズムの合う相手と、言葉を越えた次元で同調することが、自己感を維持することにつながると考えられる。親友は自己像の曖昧さを補償する像でもある(④, ⑥)。このことが「現実の自己像を認知する際に、親友像が枠組みとして用いられ」、「現実自己像と理想自己像の比較のような内省を必要とする過程よりも、外的に実在する親友との比較によって自己評価がなされる」(岡田, 1995)背景、さらには「友人から受け入

れられたい要求」(岡田, 1995)の背景にあると考えられる。

以上から、群れ関係の特徴として、深く内面的な関わりではなく、明るく楽しくノリのあうような関係を積極的に求めており、自分と似た他者と自分を、自らを動かす力という感覚的な側面で同一視することで安定感を得ていると考えられる。したがって、相手との同一性を保っている限りは自己が安定しているが、他者との異質性や自分の個別性を認識すると自分が崩れるような不安定性を有していることが推察される。

逆に、外から見れば“群れ”で“深みがない”関係に見える「群れ関係」を求めて選んでいるということは、自らを動かす力の次元に同期しうる、いわば言葉にならない次元での、何らかのつながりを感じており、その中で自己感のもとをより確かなものとして獲得しようとする試みの一環として理解することができよう。

## (2) 気遣い関係の特徴

「気遣い関係」は、①私的自己意識(岡田, 1995)や内省傾向(岡田, 1991, 1993a)が高いことから、自分の内面に目が向きやすい。②現実の自分は静的なイメージで捉えており(岡田, 1995)、③自己評価が低く(岡田, 1993a)、自己を否定的に捉える(岡田, 1995)。④友人像と理想自己像が現実自己像より肯定的に捉えられ、友人が自己の鏡として機能している(岡田, 1995)。また、⑤友人と深く関わることを拒否しない(岡田, 1991)。

以上のように、気遣い関係においては、自他に対して内省的に関わることができる(①)。自己像を対象化して捉えられる(②)ため、自分と友人を関係付けたり比較したりして捉えうる(④)。自分を否定的に捉えうる(③)のは、自己に関する内的比較によって、今の自己を否定し、変化に応じつつ自ら変化を生み出し、今の自己を乗り越える新たな自己を獲得しうる自我の強さがあるためと考えられ、その自我の強さによって友人との関わりを通して自分をつかみ(④)、友人との深いつきあひも可能となる(⑤)と考えられる。

このような自己像と友人関係の持ち方は、従来の知見において、青年期にとりくまれるとされたものに近いと考えられる。但し、躁の防衛が強く(岡田, 1993a)、互いに傷つけないよう気を遣う(岡田, 1995)、現代的側面も指摘されており、この点に関しては、わからないことや変化にまつわる不安の扱いにくさがないわけではない。相応の自我の強さがあり、自己コントロール力があるだけに制御しすぎて、行き詰まり感や孤独感から抜けだしにくく感じたり、意識的に扱いにくいものを抑圧する可能性も推察される。

しかし、そうした葛藤や抑圧に陥ったとしても、内

省が可能な自我の強さをもとにして、基本的には、自らの工夫や他者の援助によって、落ち着いて自分に向き合うことさえできれば、不安や葛藤の中に新たなものを見いだしていくことが可能であると考えられる。

## (3) 関係回避の特徴

「関係回避」は、躁の防衛が低く、深い関わりを拒否する傾向が高いなど、対人関係から退却する面が、一貫して認められる。一方、自分の内面へ目を向ける傾向や、他者からの評価を気にする傾向に関しては、結果に一貫性を欠く(岡田, 1993a, 1995, 1998)。しかし、各研究で用いられている尺度の中身と結果について細かく検討すると以下のような特徴が見出される。

自分の内面への目の向け方に関して、「気持ち安定していない」など、ネガティブなニュアンスの自己の側面には目を向けにくい(岡田, 1993a)が、「自分がどんな人間なのか」など、ニュートラルなニュアンスの自己の内面には目を向けやすい(岡田, 1995)。このことから、自分を知りたいという気持ちはあるものの、自分が悩んでいる・不安であるといったネガティブな状態には目を向けず否定する傾向があると推察される。岡田(1993a)において、自己評価がさほど低くないことが示されていることから、自分に対してネガティブな評価はしないようにしていると考えられる。

他者から見た自分への目の向け方に関しては、他者との関係の中で、実際に現在自分がうまく振舞えないこと、例えば「自分のことが皆に知られているような感じがして思うように振る舞えない」など、に対する不安は低いことが示された(岡田, 1993a)が、現在のネガティブな問題でなければ、他者から「どう思われているか」などの評価には過敏であった(岡田, 1998)。根本的には他者からの評価に過敏で、他者から認められないと自分が保てないために、ネガティブな評価を意識しないようにしていることが推察される。

以上から、自己に目を向けようとする心の動きはあるものの、自己が自己に対して気にかかる不安な側面を、自己の内的過程から切り離す分裂機制によって、「他者の目を向けられる」という形で体験する傾向があり、それに向き合って、自らの中で内省していくという作業が成立しにくいことが推察される。

ネガティブに感じられる側面を視野に入れることは、自己像が揺らぎ崩れることになるため、たいへんな恐怖であることが推察され、そのような不安を感じること自体を回避することが自己を保つために必要とされると考えられる。そのため、他者と関わることそのものを避ける傾向につながるが推察される。

一方で、今の時点で見にくいネガティブなもの、す

なわち異質性を、自分の内的過程から切り離して外のものとして分離するだけでなく、それが「外から自分に対して向けられる」という体験が生じているところに、異質性を自分の外から自分の中へ受け容て見る心的機能の萌芽が含まれていると見ることができる。したがって、まずは、自らに受容できるものとできないもの、すなわち同質性と異質性を整理し区別していくことで、異質性を外のものとして位置づけ、外の属性として見つけ検討しうる段階を経ることで、異質性と関与しうる素地ができる可能性が推察される。

#### 4.3. 現代青年の“希薄な”友人関係と従来の知見

以上、岡田の一連の研究をもとに、“希薄な”友人関係の3つのタイプにおける、主に、自己や友人の見え方・関わりのある方について検討してきた。

①群れ関係においては、自己は対象化されにくく、即自的に自らを動かす力の次で感じられており、ノリの合う友人と同調していくことが自己の安定に寄与し、そのことが、「同質性」を通して、自己や友人との関係をつかむ作業につながりうるということが推察された。

②気遣い関係においては、自己は対象化されて捉えることができ、ネガティブな側面も含めて扱い、変化にも耐えうる、「異質性」を扱えるだけの自我の強さがあるため、友人を自らの鏡として深く関わることも可能であることが推察される。ネガティブな側面に対する葛藤を避ける傾向がないわけではないが、基本的には、内的に扱うと考えられる。

③関係回避においては、自己をつかむことへの希求はあるものの、ネガティブな側面に代表される「異質性」を扱うには自我が弱く、分裂機制により、ネガティブなものを外のものとして体験することで自己が揺らぐことを避ける傾向が推察され、それが基となって、対人関係を回避すると考えられる。しかし、ネガティブなものを自分から切り離れた形で扱うことを通して、内面化につながる可能性も示唆される。

このように見てくると、現代青年に特有の友人関係の“希薄さ”とされるタイプの性質の中核そのものは、従来とりあげられてきた、前青年期から青年期の性質に類似している。①の群れ関係は前青年期から生じるgangの性質に、②の気遣い関係は従来の青年期に取り組まれるとされる内容に、③の関係回避は青年期心性の一つとしても数えられる境界例的な心性に近い。

また、これら3つの友人関係において自己が陥りうる困難は、Erikson (1968) の言う、自や他との親密な関係を築けない場合に生じうる3つの虞とも対応する。つまり、①群れ関係は、「真の融合や真の自己放棄を伴わない親密行為に身をまかせ」る虞、②気遣い

関係は、「きわめてステレオタイプ化した対人関係で満足してしまい、深い孤立感を味わう」虞、③関係回避は、「親密な対人関係からしりごみする」虞につながりうる。

自己や友人に対する親密な関わりを希求しながらも得ることが難しくなる、こうしたおそれにつながる要素として、Erikson (1968) は「疎遠性」をあげ、自己の本質を揺るがすネガティブなものを否認し、孤立させ、破壊しようとする性質として述べているが、友人関係の“希薄さ”の3つのタイプは、この自己を揺るがすネガティブ(に見えるよう)なものに対する「疎遠」化のあり方の違いとして見ることができよう。

しかし、それぞれのタイプを検討する中で、その「疎遠」化のあり方は、自己や友人への関わり方の“希薄さ”のあり方であるけれども、今の時点で自己と他者をどう捉え、どう関与していくか、今の時点でつかまえているものをどう壊さずに、さらに希求していくか、という努力も含まれている。また、一見“希薄”に見える関与のあり方の中身をよく検討すれば、自己や友人への関与を一步一步進めていくための萌芽として見ることでできるポテンシャルも含まれている。

青年期の危機的側面の本質は、現代においても、根本的には共通していると言える。しかし、それぞれの危機に際して、それぞれの仕方でも試行錯誤し探求するというよりは、それぞれの形で現在つかんでいる自己に窮屈そうにしがみついて動きがとれず、危機を乗り越えるための次の一歩をどう踏めばよいのか、その手がかりをどう検索すればよいのか、見えなくて苦労しているように見える点が、現代青年に独得の関与力の“希薄さ”として見えるのかもしれない。

その点で、それぞれの危機を乗り越えていくための観点を見いだし、サポートしうる枠組みが必要とされる。一方で、そこには、かつて青年だった者から見た“わからなさ”が“希薄さ”として映っている側面も可能性もある。そこに、現代青年の“独得”な心的過程がある可能性があり、青年だけでなくわれわれも、青年の置かれている状況と抱える課題の特質を、新たな目で見いだしていくことが必要となる。

こうした点に資するものとして、本研究では、関係の“希薄さ”として見えるものの中に、3タイプそれぞれの青年ならではの、自己と他者への関与希求のあり方があること、その性質をひとつひとつ、従来の知見をもとに見ていくことで、青年の言葉にしがたい迷いや大切にしているものが垣間見え、本来の希求力の萌芽を生かす視点について検討した。

今後の研究としては、従来の知見の積み重ねと再検討によって見えてきた、3タイプの友人関係における

自と他への関わりのあり方における「疎遠化」の特質について、心的次元における自-他、同質性-異質性の軸にまつわる機能との関連を実証的に検討すること、ネガティブな側面への関与のあり方について数量的・質的の両面から検討していくことが必要と考えられる。

## 【引用文献】

- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic Study of the child*, 22, 162-186.
- Blos, P. (1985). *Son and Father: Before and Beyond the Oedipus Complex*. New York: Norton. 児玉憲典 (訳) (1990). 息子と父親 誠信書房
- Damon, W. (1983). *Social and personality development*. Norton. 山本多喜司 (編訳) (1990). 社会性と人格の発達心理学 北大路書房
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達の变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- Erikson, E. H. (1968). *Identity-Youth and Crisis*. W. W. Norton & Company, Inc., New York.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- Gilligan, C. (1977). In a Defferent Voice: Women's Conceptions of Self and of Morality. *Harvard Educational Review*, 47, 481-517.
- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Woman's Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岩男寿美子 (監訳) 生田久美子・並木美智子 (共訳) (1986). もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店
- 広實優子 (2002). 現代青年の交友関係に関連する心理的要因の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要, 51, 257-264.
- 保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンターグループの発達の・治療的意義の検討 ある事例を通して 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 板津裕己 (1994). 自己受容性と対人態度との関わりについて 教育心理学研究, 42, 86-94.
- 川岸弘枝 (1972). 自己受容と他者受容に関する研究—受容測度の検討を中心として— 教育心理学研究, 20, 170-178.
- 町沢静夫 (1992). 成熟できない若者たち 講談社
- Mahler, M. S. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生 黎明書房
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能 齊藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝 (編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期 金子書房 Pp.155-184.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 大平健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 岡田努 (1988). 学生相談からみた現代青年の特徴 文教大学保健センター年報, 8, 24-26.
- 岡田努 (1991). 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学, 1, 11-18.
- 岡田努 (1993a). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努 (1993b). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 (1998). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 教職研究, 9, 29-39.
- 岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 小此木啓吾 (1980). シゾイド人間—内なる母子関係をさぐる 朝日出版社
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 千石保 (1988). 現代若者論 弘文堂
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の自己表明に関連する心理的要因についての探索的検討—半構造化面接を用いて— 跡見学園女子大学文学部紀要, 37, 49-74.
- Sullivan, H. S. (1953). *The Interpersonal Theory of Psychotherapy*. W. W. Norton & Company, Inc., New York.
- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心

- 心理学研究, 42, 21-28.
- 和田実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連. 心理学研究, 67, 232-237.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子(1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報) - ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 - 研究助成論文集, 23, 206-215.
- 山田和夫 (1989). 境界例の周辺: サブクリニカルな問題性格群. 季刊精神療法, 15, 350-360.
- 山田和夫 (2002). 新版「ふれ合い」を恐れる心理. 青少年の“攻撃性”の裏側にひそむもの. 亜紀書房